



Title	エレン・ケイのデザイン思想 : 自然らしさの理想をめぐって
Author(s)	池山, 加奈子
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エレン・ケイのデザイン思想 自然らしさの理想をめぐる

池山 加奈子 大阪大学大学院在学

はじめに

本発表は、19 世紀から 20 世紀の移行期のスウェーデンで活躍した知識人、エレン・ケイ (Ellen Key, 1849-1926) に焦点を当てる。教育思想家、社会批評家、女性解放運動家として知られるケイは、社会における芸術や美を重視し、芸術批評や国民の生活美化運動、デザインの理念形成にも関わった。ケイは、貧富の差を問わず、どんな立場にある人も家庭内を美しくできると説いた。その思想はスウェーデンの民主的なデザイン理念の礎となった。

ケイのデザイン思想において特筆すべきは、美の最たるものとして自然を挙げ、その法則を重んじていることである。本発表では、自然らしさの理想という観点から彼女の思想を再検討することを通じて、スウェーデンのモダンデザインの理念と造形の両面における、ケイの言説の意義を明らかにする。

背景 — エレン・ケイの原風景

エレン・ケイは、自然豊かなスズホルムで育ち、幼少期からスウェーデンの田園風景や民俗文化に親しんだ。10 代の頃には、民俗学者のアルトゥール・ハセリウス (Artur Hazelius, 1833-1901) のナショナル・ロマンティシズムに基づく収集活動に関与した。彼女はその後、ストックホルムに移住するが、原風景となる農村部の景色や民間伝承、そして手工芸であるスロイド (slöjd) やヘムスロイド (hemslöjd) を生涯愛した。

また、ケイは読書や独学を通じて、合理主義・実証主義的な思想に、田園的な生活への愛着やロマン主義的信念を併せ持つ独自の思想基盤を形成した。

さらにケイは、18 世紀スウェーデンの軍人にして新古典主義の建築家、芸術家のカール・アウグスト・エーレンスヴァルド (Carl August Ehrensvärd, 1745-1800) の芸術観に影響を受けた。エーレンスヴァルドは、美を自然や本質的な有用性と結びつけ、人工的な装飾や虚飾ではなく、自然な必然性や理にかなった造形に美を見出す合理主義的なアプローチをとる。このような、自然の摂理と人間の健全な本性の実現を理想とする美の捉え方は、ケイに継承された。

理論 — 自然らしさの理想とは何か

ここでは、ケイの著書『すべての人に美を — 4 つの文章 (Skönhet för alla: fyra uppsatser)』を通じて彼女のデザイン思想を考察する。同書は、1897 年のエッセイ「家庭の美 (Skönhet i hemmen)」の改訂版を中心に、関連する短文 3 本を加えて 1899 年に刊行された。当時の都市労働者の劣悪な生活環境を背景に、家庭や日常における美のあり方について論じている。

ケイのデザイン思想が最も具体的に示されるのは「家庭の美」であるが、その他 3 編「日常の美 (Vardagsskönhet)」「祝祭の風習 (Festvanor)」「夕暮れの暖炉 (Skymningsbrasan)」も、彼女の思想を理解する上で重要であり、そこから次の点を読み取れる。第一に、対象それ自体の属性ではなく、主体の態度やものの見方を重視する。第二に、特別な行事に限らず、自然の移ろいを感じる日常に祝祭性を見出すべきだとする。第三に、無垢なる子ども時代の経験を重んじる。第四に、暖

炉の炎を、北欧の太陽を家庭内に体現した自然の象徴であると捉え、子どもの想像力を喚起するものとする。第五に、自然を単なる物質的資源ではなく意志を持つ存在として敬う自然観を持つ。総じて、自然と家庭、芸術と家庭を不可分のものとし、暮らしの中に美と善行のつながりを見出す姿勢を明らかにしている。

「家庭の美」は、労働者階級、特に女性に向けて書かれた。ケイによれば、女性は家庭での手仕事を通じて誠実な労働倫理と趣味の良さを培ってきたため、その潜在的な力を今度は都市生活の消費者として発揮できると考えた。ここには女性解放運動家としての側面と、母性を重視する立場が表れている。

ケイの「自然らしさの理想」は、二つの意味で解釈できる。第一に、自然が持つ摂理に倣うことを指し、それは簡素で統一されていること、有用性と美しさが調和していること、合目的であることを意味する。彼女は自然の形態それ自体ではなく、その法則を真似るべきだとする。第二に、人間本性の発露を指し、それは嘘偽りがなく真実であることや個人がその人らしさを実現することを意味する。

ケイによると、これらの両方を架橋する原理が「簡素さ」である。ケイは、素材そのものの状態をできるだけ残した簡素な形態、不必要な装飾や虚飾の排除、調和のとれた色彩、自然光の重視といった具体的な指針を示している。また、友人で画家のカール・ラーション (Carl Larsson, 1853-1919) が家族で増改築した住居「リッパ・ヒットネース」を理想的な住まいの手本として挙げている。

実践 — 自然らしさの理想を求めて

ケイは、公的・私的領域の双方で、自身の理想に基づいた空間を実践した。

公的な実践として、1899年の春と秋に「ブルー・ルーム」「グリーン・ルーム」と題した室内展示を行い、教育の一環として、労働者が安価に美しい家を実現できることを示した。この展示は、芸術

家やデザイナーとの協働によるものであった。「グリーン・ルーム」展には約5,000人が訪れ、この成功が『すべての人に美を』の出版につながった。

私的な実践として、ケイの晩年の住居「ストランド荘」が挙げられる。異なる時代の品が彼女の趣味により統一され、明るい色彩の壁、簡素な形態の家具、軽いカーテン付きの自然光が入る大きな窓、鉢植え植物のある空間は、彼女の理想を体現していた。

おわりに

ケイの著作は一般の人々に広く読まれたほか、若い世代の建築家、デザイナー、デザイン理論家たちにも大きな影響を与えた。

美術史家でモダンデザイン運動家のグレゴール・パウルソン (Gregor Paulsson, 1889-1977) もその1人である。彼はスウェーデン・スロイド協会 (Svenska Slöjdföreningen, 現 Svensk Form) での活動を通して、ケイの民主的な思想を継承した。パウルソンは、芸術家を産業につなぎ、美しい大量生産品を安価で生み出そうとする取り組みを行った。1919年には『より美しい日用品 (Vackrare Vardagsvara)』を著し、それはのちに国のデザイン政策のスローガンにもなった。

スウェーデン国内には当時も今日も、ケイを批する立場が存在する。しかし、彼女の理論と実践の根底にある「自然らしさの理想」は、今日のデザインにも示唆を与えうる。その意義とは、次のように結論づけられる。すなわち、理念においては、誰もが自分らしく心地よい暮らしを実現できるという民主的なデザインの礎を築いた。それは画一的なスタイルを強要するのではなく、個人の人間本性としての趣味の発露であるべきだという主張であり、それが実現できる社会の環境を整える機運を醸成した。造形においては、自然の摂理に倣い、簡素で機能的、明るく、調和する色彩を持つデザインの規則をもたらし、近代のスウェーデンにおける新たな住まいのあり方を提案した。